

～未来の子供たちへ、豊かな自然を届けるために～
中国広州市採石跡地の森林破壊を植樹で救う、5ヵ年プロジェクトを開始
初年度 約1,000本の試験植樹を実施
～2020年までに約20万本の植樹を予定～

創業以来65年以上はちみつやローヤルゼリーなどミツバチ産品を扱う株式会社山田養蜂場(本社:岡山県苫田郡鏡野町 代表・山田英生)は、2015年3月19日(木)から3月22日(日)までの4日間、中国広東省広州市にて約1,000本の試験植樹を実施、2020年までの5ヵ年植樹プロジェクトをスタートさせました。

当社では社員やボランティアの皆様と共に、1999年より国内およびネパールでの植樹活動を進めてまいりました。2001年からは砂漠化が進む内モンゴルに緑を蘇らせるため、植物生態学の権威である横浜国立大学名誉教授 みやわき あり 宮脇昭氏の指導のもと、現地での植生調査をスタート。2004年より実際に植樹を開始し、内モンゴルにて累計136万328本の植樹を実施、昨年9月に11年間に亘るプロジェクトが完結いたしました。

そして2015年、第三弾となる中国植樹プロジェクトを広州市でスタートいたします。広州市は内モンゴルと同様、経済発展に伴い森林破壊が進んでおり、特にレアアースや硫鉄鉱などの採石跡地の森林破壊が深刻で、早急な植生回復が必要とされています。これまで何度か現地でも植樹を試みてきたようですが、残念ながら全て失敗に終わっています。

そこで、土地本来の樹種に基づく植樹(宮脇式)を実践する宮脇昭教授の指導のもと、日系企業として初めて広州での植樹をスタートいたしました。本年度は試験植樹として約1,000本の植樹を実施、来年2016年より本格的な植樹をスタートさせ、年間4万本の植樹を行い、5年後の2020年までに約20万本の植樹を実施していく予定です。



広州市採石跡地での植樹の様子(2015年3月撮影)



2004年より現地の植生に合った木々を植える宮脇式植樹を啓発・実施してまいりました。



植樹前の林西県(2004年撮影)



10年後(2014年6月撮影)

当社の中国での植樹活動



【1999年～2014年までの総植樹本数】

- ・中国 内モンゴル 136万328本
 - ・中国 安徽省 12万本
 - ・ネパール 45万2,291本
 - ・日本 12万5,159本
- 計:205万7,778本**

◇本件に関するお問い合わせ◇

株式会社 山田養蜂場 文化広報室 関(ts0975@yamada-bee.com)
〒708-0393 岡山県苫田郡鏡野町市場194 TEL:0868-54-1906(月～金 9:00～17:30、土日祝除く)
FAX:0868-54-3346 ホームページ: http://www.3838.com

山田養蜂場の植樹活動について

山田養蜂場の植樹活動は1998年にネパールで開催された国際養蜂会議にさかのぼります。

当社代表の山田英生が会議に出席した際、ネパールでの大量の森林伐採や、それに伴う大規模な土砂崩れが発生している実態を目のあたりにしました。

当社の原点は、自然とともに生きる養蜂業です。「自然との調和」を理念に掲げる山田養蜂場では、未来の子供たちに豊かな自然環境をそのまま残していく責任があると考えています。

そのため、ネパールでも自分たちで何かできないかと考え、まず衣類等の送付を行いました。しかし、ただ物やお金を送るだけの活動では、かえって彼らの自立を妨げることになるかもしれません。

本当の意味での自立支援活動に繋がりたい。

そうした思いの下、翌1999年、カトマンズで日本語学校を営むシャム氏との出会いをきっかけに、700本の植樹を行ったのがネパールでの植樹活動の始まりです。

2001年には砂漠化が進む中国での植生調査を横浜国立大学と共同で開始し、2004年より植樹活動を実施してまいりました。

通信販売を主軸としている当社では、企業活動を継続していく上で、紙の消費は避けられないのが現状です。当時、社内の紙の使用量を計算したところ、概算で年間1,500トンの紙を使用していることが分かりました。

ここから換算して、毎年3,000本以上の木を植えていく必要があると考え、植物生態学の権威であり、植樹のスペシャリストである横浜国立大学名誉教授 宮脇昭先生と、同大学名誉教授 藤原一繪先生にご指導いただきながら、宮脇式植樹で現地の植生に合った木々を植えています。

当社の植樹活動

年	参加人数	内モンゴル自治区		安徽(アンキ)省	ネパール	国内
		フフホト市・ 林西県	トフトサキ市 生態園区建設			
1999	—	—	—	—	700本	—
2000	—	—	—	—	15,000本	—
2001	—	植生調査	—	—	35,000本	30,547本
2002	—	植生調査	—	—	30,000本	—
2003	—	植生調査	—	—	50,000本	—
2004	300名	20,000本	1,030,028本	—	44,000本	63,900本
2005	300名	20,000本	5,150本	—	10,000本	—
2006	300名	50,000本	5,150本	—	13,654本	—
2007	270名	50,000本	—	—	17,234本	4,730本
2008	280名	50,000本	—	—	21,000本	—
2009	240名	50,000本	—	—	50,660本	—
2010	290名	50,000本	—	—	50,660本	15,982本
2011	300名	—	—	40,000本	50,530本	—
2012	400名	—	—	40,000本	60,852本	10,000本
2013	400名	—	—	40,000本	501本	—
2014	120名	30,000本	—	—	2,500本	—
合計	3,200名	1,360,328本		120,000本	452,291本	125,159本

植樹総合計:2,057,778本

みやわき あきら

※宮脇昭先生 プロフィール



1928年、岡山県生まれ。横浜国立大学名誉教授、(財)地球環境戦略研究機関 国際生態学センター長。ドイツ国立植生園研究所で潜在自然植生理論を学び、世界を舞台に国内外1,700ヶ所以上に、合計4,000万本を超える植樹を行ってきた。その土地本来の樹種「潜在自然植生」に基づく植樹を実践、指導。また今回の震災を受けて、植樹による緑の堤防づくりを提唱。

1991年「日本植生誌」の完成で朝日賞受賞

1992年 紫綬褒章受章

2006年 ブループラネット賞受賞

2014年「第5回 KYOTO地球環境の殿堂」殿堂入り

ふじわら かずえ

※藤原一繪先生 プロフィール



1944年生まれ。横浜国立大学卒業。フランス中央研究機関(CNRS)、給費研究員(リール大学)、横浜国立大学環境科学研究センター助手などの経歴をもつ。現在、横浜国立大学名誉教授、横浜市立大学特任教授。宮脇 昭先生と共に国内外での森作りを指導。

著書に「混源植物」「環境問題を考える」(共著)「東南アジアの植物と農林業」(共著)「日本植生誌」全10巻(共著)など